

# 中村学園大学栄養科学部・人間発達学部学生の 入学時における英語基礎力の現状

木原美樹子 福田慎司 山根一文

## On the Results of the SLEP Test Given to Students at the Faculties of Nutritional Sciences and Human Development, Nakamura Gakuen University

Minako Kihara Shinji Fukuda Kazufumi Yamane  
(2002年11月26日受理)

### 1. はじめに

1995年から中村学園大学家政学部<sup>1</sup>の推薦入試の実施方法が変更された。学力試験が廃止され小論文形式の入試となった。これにともない、英語の基礎力のない学生が少なからず入学してくることが予測された。入学後の英語教育の効果をあげるために、以前にも増して学生の入学時の英語力を知る必要性が高まった。そこで、一般入試による入学生も含め、新入生に対して基礎力診断テストを実施することにした。以来毎年4月にこの診断テストを行っており、今年で8年目になる。<sup>2</sup>

基礎力診断テストには「Secondary Level English Proficiency Test」(以下SLEPテスト)を用いた。このテストは、英語を母語としない学習者向けにアメリカで作成されている。リスニングとリーディングの能力を測るもので、英語を外国語として学んでいる我々の学生の基礎力を知るのに適したテストだと考える。

今回、1998年から2002年までに実施した5年分のSLEPテストの結果(留学生を除く)をもとに、(1)5年間の平均値の推移、(2)推薦入試による入学生増および学部定員増が及ぼす影響、(3)1998年と2002年における専攻別得点分布の比較、以上3つの観点から分析を試みた。これらの分析結果は、栄養科学部・人間発達学部の英語教育を効率良く進めていく上で

有用であると思われる。

### 2. 実施方法

中村学園大学栄養科学部と人間発達学部新入生に対して、1年次前期開講の選択必修科目「総合基礎英語A」の第2回目の授業時間に、SLEPテストを実施している。このテストは、英語を母語としない中学・高等学校レベルの者の英語力を、聴解力(Listening Comprehension, 以下LC)と読解力(Reading Comprehension, 以下RC)の2つの観点から測るものである。LCを測るSection 1とRCを測るSection 2の2部で構成されており、それぞれ75問、計150問からなる。Section 1は録音テープを使った設問である。Section 2は文法、語彙を中心に一部短い英文の理解力を問う設問から成り、書かれた英語を理解する能力を測る。所要時間はSection 1, Section 2ともに45分である。SLEPテストには形式と内容ともに同様の3つのフォーム(form)がある。異なるフォームの得点は、スケールド・スコア(scaled score)に換算することにより相互に比較できる。1998年から2000年までの3年間はフォーム1を、2001年と2002年の2年間はフォーム3を使用した。本稿では、学生の得点をスケールド・スコアに置き換えて、5年間のテスト結果の比較分析を行った。

1 2002年4月から家政学部は栄養科学部と人間発達学部に変更された。

2 この診断テストの結果の一部は、1999年度の中村学園大学・中村学園大学短期大学の教育ワークショップで発表した。

各年の受験者数は表1のようにになっている。各専攻の入学定員増減により、受験者数に増減がある。また、テストを実施している「総合基礎英語A」は必修科目ではないため、入学者全員が受講するわけではない。児童学科児童教育学専攻（以下E）は2000年から定員50名で1クラス編成となり、児童学科児童学専攻（以下P）は2001年から定員100名で2クラス編成となった。食物栄養学科食物栄養学専攻（以下D）は2001年から食物栄養学科管理栄養士専攻（以下N）に統合され、Nは定員200名で4クラス編成となった。<sup>3</sup>

表1 専攻別受験者数（人）

	D	N	P	E	合計
1998年	51	103	52	108	314
1999年	53	107	56	108	324
2000年	52	109	46	60	267
2001年		208	88	57	353
2002年		200	86	48	334

### 3. 結果と考察

#### 3.1. 5年間の平均値の推移

##### 3.1.1. 受験者全体のSLEPテストの平均値

受験者全体のSLEPテストの平均値は、表2・図1が示すように、2001年に顕著に低下しており、次の2002年も同様の平均値となっている。LCを測るSection 1とRCを測るSection 2に分けて、全受験者の平均値の推移（図2）を見ると、RCはこの5年間ほとんど変化がない。LCに関しては、2001年と2002年で平均値が低くなっている。

表2

	TOTAL	LC	RC	受験者数	Test Form
1998年	36.0	16.1	19.9	314	1
1999年	36.1	16.3	19.8	324	1
2000年	36.9	17.1	19.8	267	1
2001年	33.9	14.2	19.7	353	3
2002年	34.4	14.4	20.0	334	3

図1

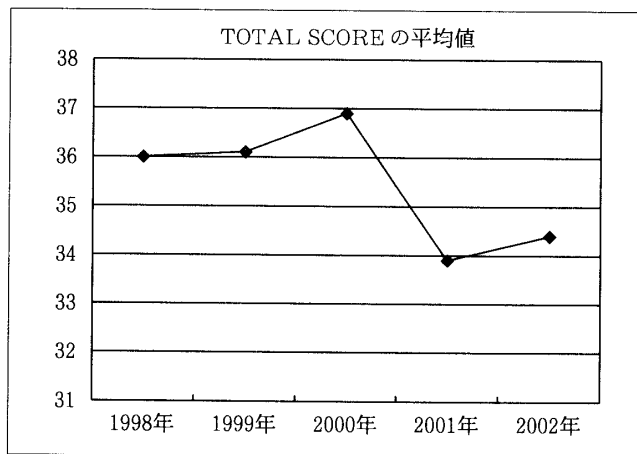
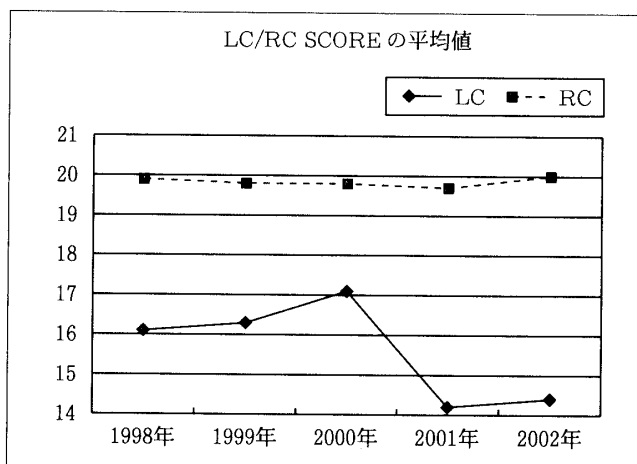


図2



##### 3.1.2. 四専攻別SLEPテストの平均値

平均値の推移を専攻別に表したものが表3・図3である。最も際立っているのは2000年から2001年にかけての変化である。N、P、E全てにおいて2001年にスケールド・スコアの平均値が大きく下がっている。Nは2.8、Pは3.1、Eは4.7下がっており、受験者全体では表2に示されていたように3.0下がっている。この平均値低下の要因としては、以下の3つが考えられる。<sup>4</sup>

- (1) 日本の大学入学生全体の平均的学力が低下した。
- (2) 2001年に入学定員を増やした。NとPの入学定員は2001年に約2倍になった。入学定員が増えたことで英語力の低い学生が入学した。
- (3) 推薦入学者数の入学者数に占める割合が2001年

3 新学部設立によりNは栄養科学部栄養科学科、Pは人間発達学部人間発達学科幼児発達学専攻、Eは人間発達学部人間発達学科児童発達学専攻と名称が変更された。

4 この5年間で、SLEPテストの2種類のフォームを使った。難易度が同じになるように統計処理されたスケールド・スコアを使用して、この5年間の平均値を比較している。従って、2001年の平均値の低下はフォームの違いによるものではない。

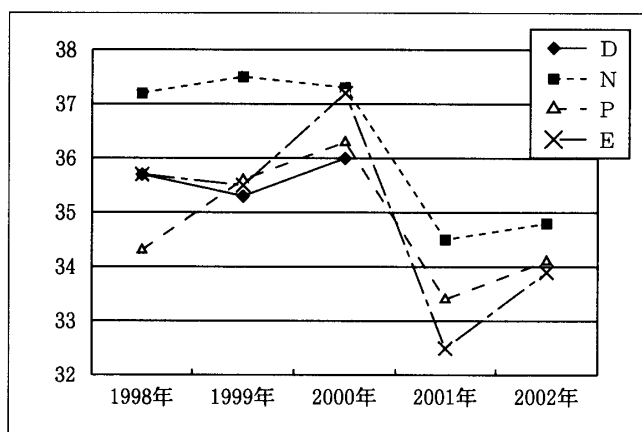
に全学科・専攻で増加した。NとEは約9%、Pは約5%増であった。増加した推薦入学者が全体の平均値を下げた。

以下、これらの要因について検討する。(1)については、文部省により高等学校の英語教育の内容が大幅に変更されたのは1994年であり、平均値が顕著に低下している2001年入学生に対して、特に影響が考えられる教育内容の変更はない。日本の大学生全体の学力低下という要因では、2001年に特に低下した理由が説明できない。(2)に関しては、平均値が低下している2001年に、NとPの入学定員が増加していることから、影響が考えられる。しかしながら、この理由のみでは、入学定員が変わらなかったEも同様に平均値が下がっている現象が説明できない。(3)の推薦入学者数の入学者数に占める割合については、2001年に特に増えており、2002年もほぼ同じ割合である。これが最も大きく影響したと考えられる。この推薦入学者数増加に関しては次の節で詳述する。

表 3

	D	N	P	E
1998年	35.7	37.2	34.3	35.7
1999年	35.3	37.5	35.6	35.5
2000年	36.0	37.3	36.3	37.2
2001年		34.5	33.4	32.5
2002年		34.8	34.1	33.9

図 3



### 3.2. 四専攻別推薦入学者の割合と平均値

#### 3.2.1. Dの推薦入学者の割合とSLEPテストの平均値

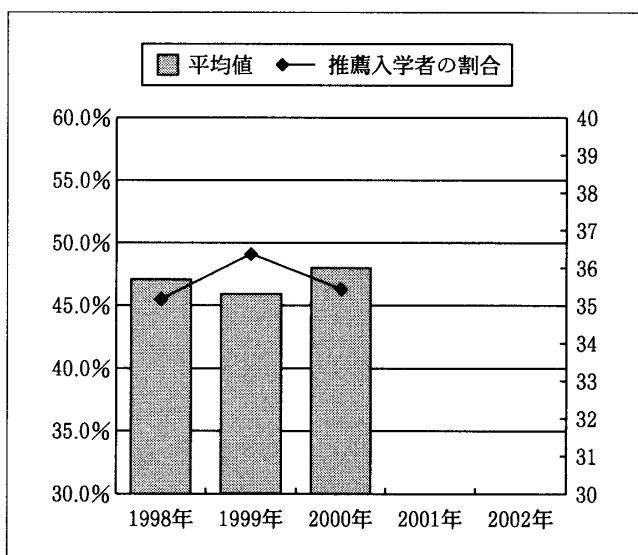
表4は1998年から2000年までのDの入学者数、推薦入学者数、推薦入学者数の入学者数に占める割合

及びスケールド・スコアの平均値の推移を示している。図4は推薦入学者の割合と平均値の推移を分布図で表したものである。3年間のデータではあるが、表4・図4から推薦入学者の割合が最も高い1999年の平均値が最も低くなっていることが分かる。

表 4

	入学者数	推薦入学者数	推薦入学者の割合	平均値
1998年	55	25	45.5%	35.7
1999年	55	27	49.1%	35.3
2000年	54	25	46.3%	36.0
2001年				
2002年				

図 4



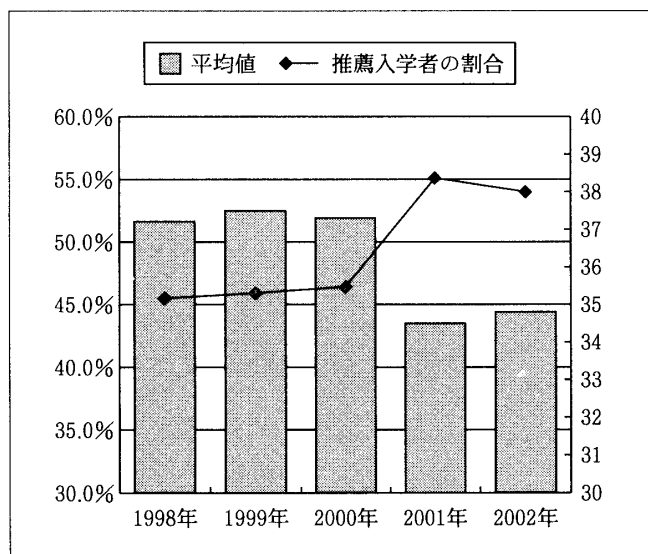
#### 3.2.2. Nの推薦入学者の割合とSLEPテストの平均値

表5はNの1998年から2002年までの5年間の推移を表している。2001年に入学者数が前年の112人から216人と2倍近く増え、推薦入学者数も前年の52人から119人と倍増している。このことにともない、推薦入学者の割合が46.4%から55.1%と8.7%増加している。一方、平均値は1999年は37.3であったのが2001年は34.5と2.8下がっている。2002年は推薦入学者の割合が2001年に比べて1.1%減り、平均値は0.3%とわずかながら増加している。推薦入学者数が倍増している2001年以降とそれ以前の3年間とに、平均値において大きな違いが見られる。このことは、図5の分布図に明らかである。

表 5

	入学者数	推薦入学者数	推薦入学者の割合	平均値
1998年	110	50	45.5%	37.2
1999年	109	50	45.9%	37.5
2000年	112	52	46.4%	37.3
2001年	216	119	55.1%	34.5
2002年	215	116	54.0%	34.8

図 5



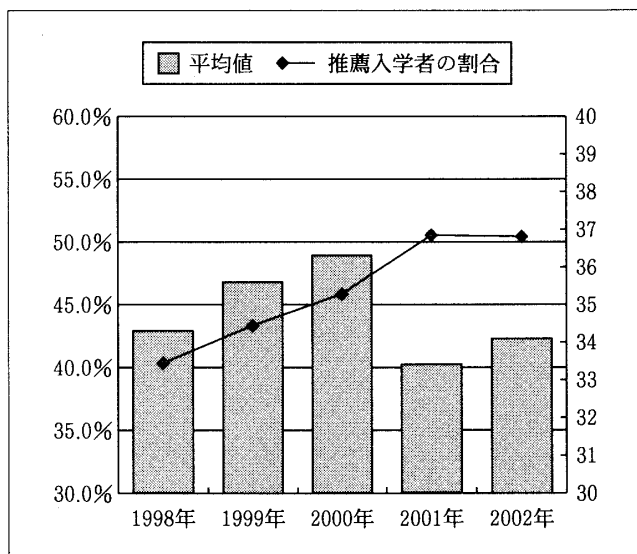
3. 2. 3. Pの推薦入学者の割合とSLEPテストの平均値

表6はPの過去5年間の推移を表したものである。2001年に入学者数が51人増えて111人に、推薦入学者数もほぼ倍増の56人になっている。これに伴い、推薦入学者の割合が4.7%増加している。逆に平均値の方はポイントにして2.9下がっている。2002年の推薦入学者の割合は2001年と比べてわずかに減っており、平均値はわずかながら上がっている。図6の分布図で見ると、PもNと同じく、2001年以降とそれ以前とでは平均値に大きな違いがある。

表 6

	入学者数	推薦入学者数	推薦入学者の割合	平均値
1998年	62	25	40.3%	34.3
1999年	60	26	43.3%	35.6
2000年	59	27	45.8%	36.3
2001年	111	56	50.5%	33.4
2002年	123	62	50.4%	34.1

図 6



3. 2. 4. Eの推薦入学者の割合とSLEPテストの平均値

表7はEの過去5年間の推移を表している。2000年は前年に比べ推薦入学者の割合が0.9%増えて39.1%になっている。平均値は1.7ポイント上がっている。予測に反し、推薦入学者の割合の増加とともに平均値も上がっている。2001年と2002年は推薦入学者の割合が増え、平均値は下がっている。このことは図7の分布図に見ることができる。

以上のことから、D、N、P、Eのいずれにおいても、わずかながら例外（Eの2000年の推薦入学者の割合と平均値の関係）はあるものの、推薦入学者の割合が増えると平均値が下がると言うことができる。

入学生の平均的英語力を上げるには、以前のように推薦入学試験に英語を課すか、推薦入学者の割合を減らすことが一番の方策であろう。このことが無理であるとすれば、SLEPテストの結果を用いて英語のクラスを能力別に編成し、授業の内容をそれぞれのレベルに応じたものにする必要がある。これはすぐにでも実行可能と思われる。

表 7

	入学者数	推薦入学者数	推薦入学者の割合	平均値
1998年	110	38	34.5%	35.7
1999年	110	42	38.2%	35.5
2000年	64	25	39.1%	37.2
2001年	58	28	48.3%	32.5
2002年	61	29	47.5%	33.9

図7

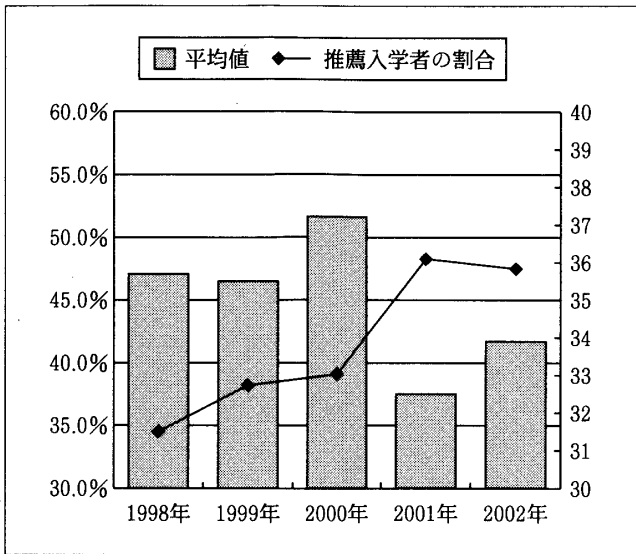
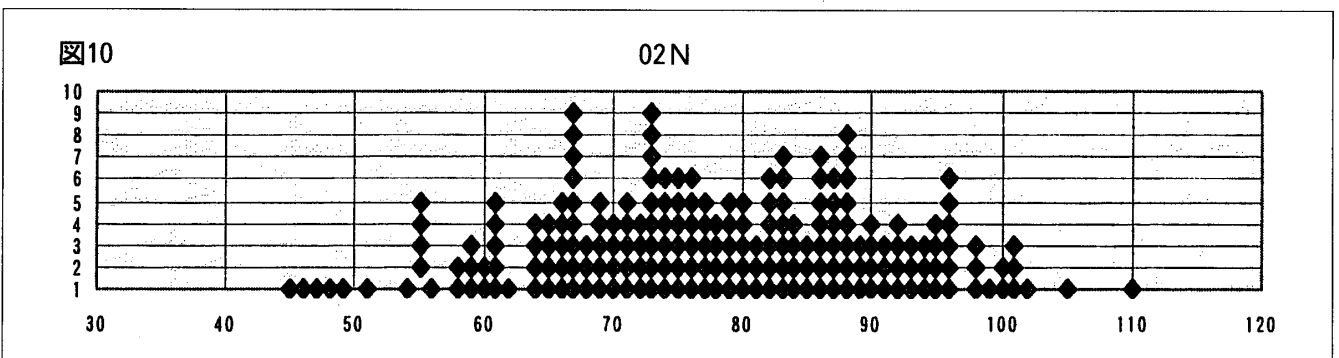
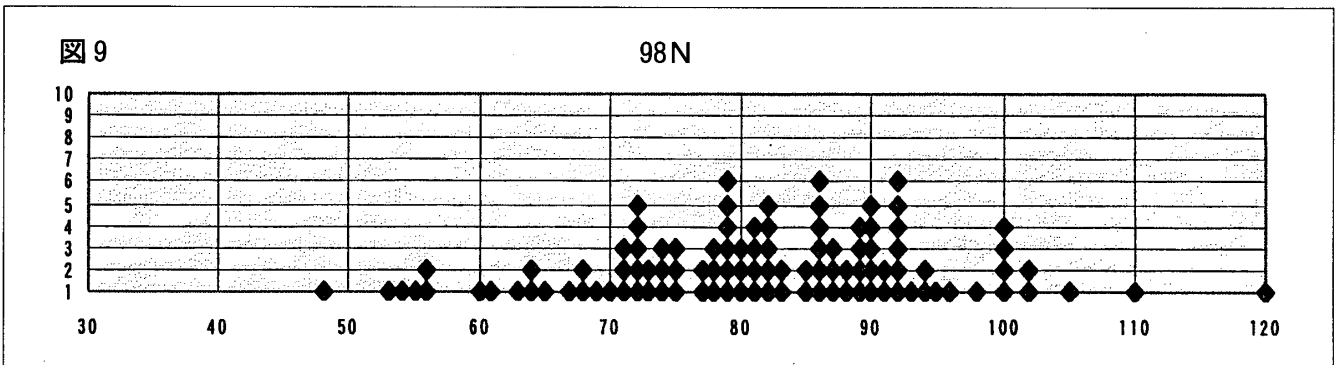
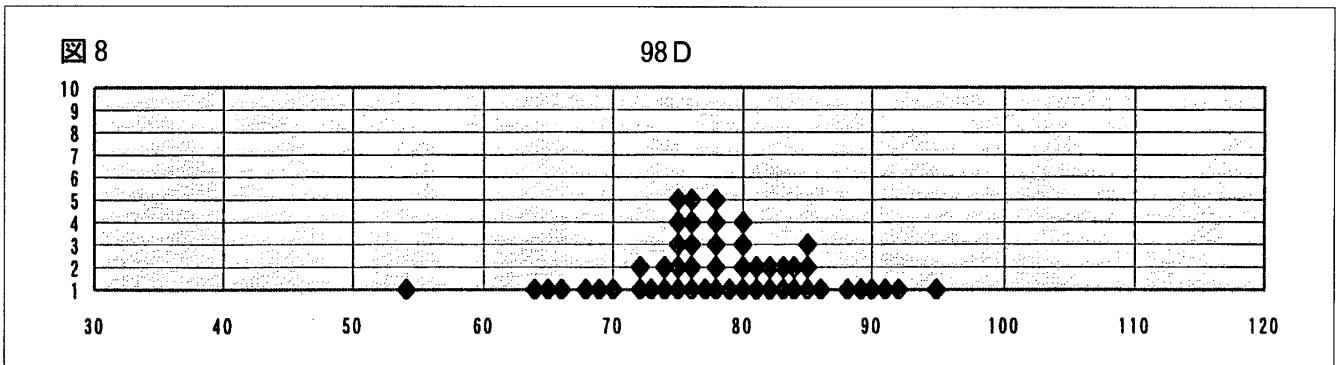


図8～図10は、DとNについて1998年と2002年の得点分布図である。1998年のDでは、受験者が少ないため少し形は崩れているが、75点から78点を中心に比較的正規分布に近い形が見てとれる。1998年のNでは、1998年のDと比べると最低点と最高点の開きは出ているものの、多くの受験者が中間の71点から92点の間に入っている。このような場合、授業時にクラスの平均的英語力がある程度想定することができるため、一般的に授業の効率も良くなる傾向がある。一方、2002年のNでは、最頻点が67点と73点であるが、88点を頂点とする山も見える。これは、入学定員が増えたことにより、英語の学力上位者だけでなく、中位・下位者も多数入学してきて英語力の分化を起こしているためと考えられる。また、1998年に比べ、2002年は英語の試験を課さない推薦入試で入学してきた学生が割合にして8.5%も増え

### 3.3. 1998年・2002年の素点分布図の比較

#### 3.3.1. DとNの素点分布図



たため、61点以降の低い点数を取った者が増えた原因の一つとなっていると考えられる。このような場合、現在行っている4つのクラス指定での授業では、クラス内の英語力差が大きいため、授業時に教える英語の内容やレベルを設定しにくいという弊害がある。できれば、習熟度別編成で4クラスに分け、授業を行うことが望ましい。

Pの分布図(図11・図12)を見ると、1998年では、42点から104点までの広い範囲にほぼ平らに得点分布が見られる。このような傾向をもつ学生達を同一クラスにして英語の授業を行うのは、教師にとって

は焦点が合わせにくく、学習者にとっては自分のレベルに合った授業が行われにくいなどの弊害をもたらしやすいのは先に述べた通りである。2002年では、最頻点78点を頂点とする正規分布とも考えられるが、92点という上位に固まって得点者がいることや、36点を最低として60点以下の英語学力下位者の存在も忘れてはならない。授業を行う場合、SLEPテストの結果から学生一人一人の英語力をしっかりと把握して、各学生の英語力に合った課題を与える等の工夫が必要であろう。

### 3.3.2. Pの素点分布図

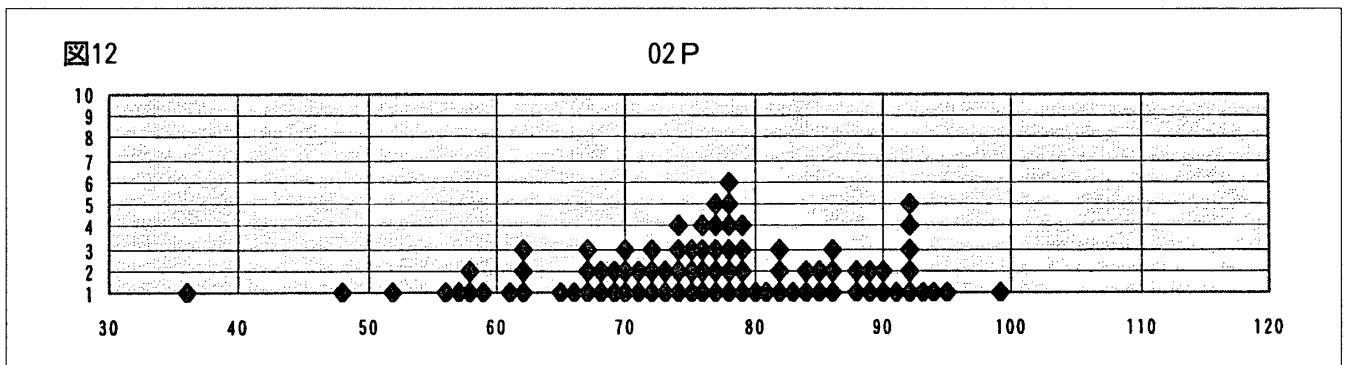
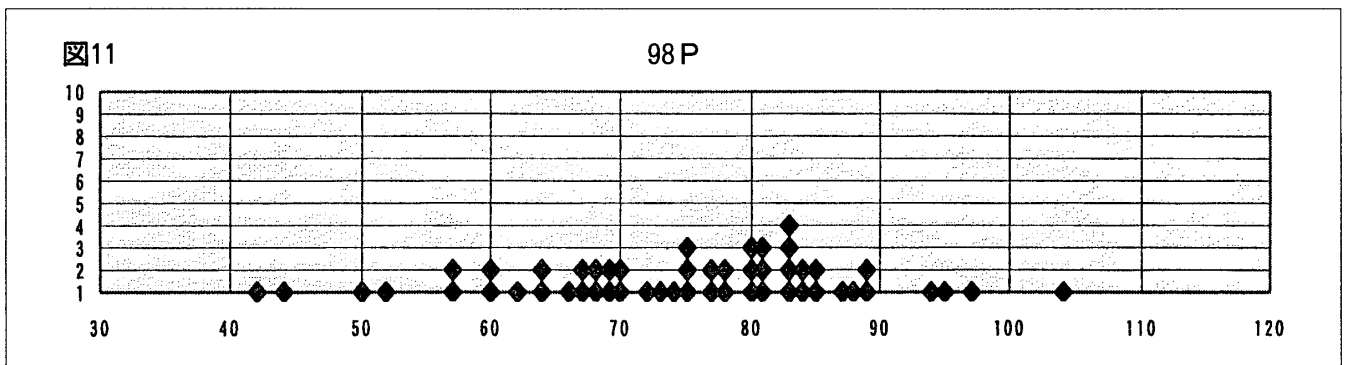
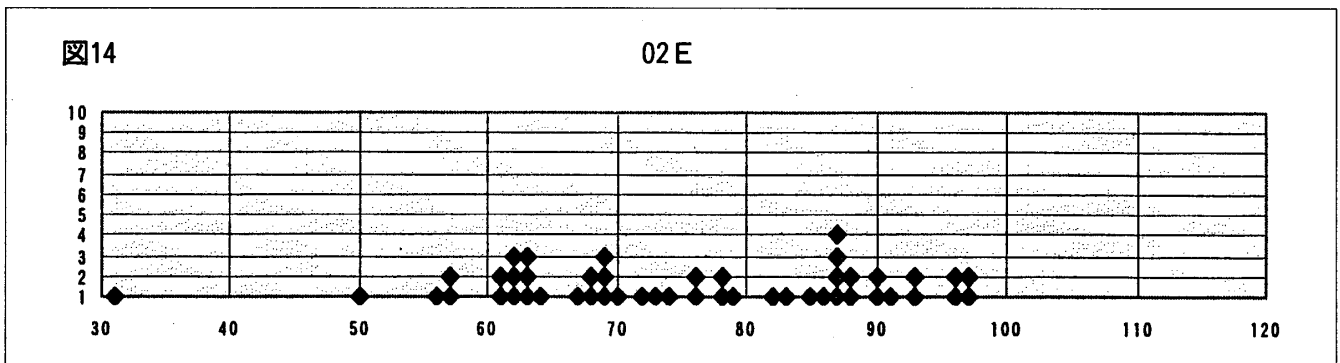
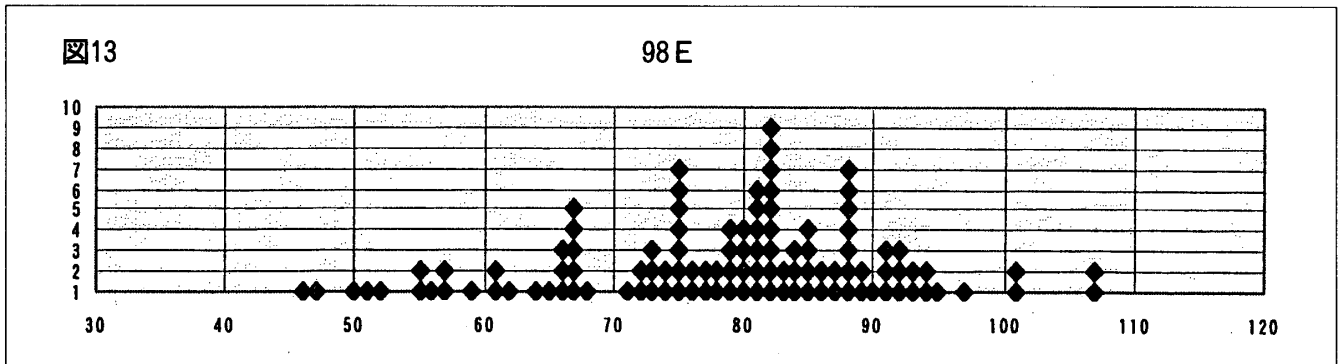


図13・図14のEの2つの年の分布図を比べると、2002年の特徴がはっきりとわかる。1998年は正規分布にはなっていないものの、最頻点82点付近が、Eの学生の平均学力だと考えることができる分布となっている。一方2002年では、ある得点範囲に分布が固まるのではなく、広い範囲にまたがって、平均して散らばっている。31点から97点と、得点分布が広いため、先に述べたように入学後、英語の授業を行う時、全学生を同一クラスで行うのは、非常に効率が悪いと考えられる。しかし、Eの場合、定員を考えると1クラスの編成であるため、PとE合同で、人間発達学部として習熟度別編成クラスを検討することも必要であろう。

## 3.3.3. Eの素点分布図



## 4. まとめ

3.1で見たように、2001年と2002年の2年間、学生の英語の聴解力が著しく低下している。これから学生の英語コミュニケーション能力を高めていく上で、ますます音声面を重視した授業を行っていくことが必要であろう。

3.3で述べたように、2002年の専攻別得点分布図から、各専攻で英語力中位の学生が特に多くはなく、低得点から高得点まで広がりがあることがわかった。このように英語力の低い学生から高い学生までが混在する状況で、全ての学生に対し同じレベルの授業を行うことは、英語力を高めるのに効果的ではない。個々の学生の英語力に応じた授業を行うには、習熟度別のクラス編成にすることが必要である。そのためには、4月入学時のオリエンテーションの中でSLEPテストを一斉に実施し、全学生の英語力を測ることが望ましい。現在は「総合基礎英語A」の授業中にテストを実施しているが、この授業は選択必修科目であるため、入学者全員が履修するとは限らない。入学時のオリエンテーションの中でSLEPテストが実施できれば、入学者全員が受験する体制がとれる。

今後の栄養科学部・人間発達学部における英語教育の改善には、1年次を終えた段階で、もう一度別のフォームのSLEPテストを実施し、1年次の英語

学習の成果を分析することも必要であろう。

SLEPテストの異なるフォームのテスト結果を相互に比較するには、スケールド・スコアに変換する必要がある。スケールド・スコアは10から35の間で表されるため、素点に比べて学生間の細かい学力差が現れにくい。今後は入学時に行うSLEPテストを毎年同じフォームで実施し、各年の英語力の差をより細かく見ることができるようになりたい。

## 参考文献

- 田中敏『実践心理データ解析』新曜社、1996年。  
 鳥飼玖美子、新藤久美子『大学英語教育の改革』三修社、1996年。  
 安岡高志 他『授業を変えれば大学は変わる』プレジデント社、1999年。  
 Ellis, R. *SLA Research and Language Teaching*. Oxford: OUP, 1997.  
 Numan, D. *Research Methods in Language Learning*. Cambridge: CUP, 1992.

## Appendix 1

## SLEP Test の各セクションの問題の説明

## SECTION I

## LISTENING COMPREHENSION

Time—45 minutes

Directions for Questions 1-25: For each of these questions, you will hear four sentences. They will be said only once. They are not written in your test book. You have to listen carefully in order to understand what the speaker says. While you are listening to the four sentences, look at the picture in your test book and choose the sentence that best describes what you see in the picture. Then, on your answer sheet, find the number of the problem and mark your answer. Look at the sample picture in your test book. Now listen to the four sentences.



Sentence (B), "The door of the bus is open," best describes what you see in the picture. Therefore, you should mark answer (B). Now let us begin this part with question number one.



SECTION II  
READING COMPREHENSION

Time—45 minutes

**Directions for Questions 1-10:** These questions relate to the pictures on the opposite page. You will see different pictures of the little boy at each hour of the day. The pictures are shown inside a clock. Look at the pictures and study them. Then, for each question, you will read a statement by the little boy that describes one of the pictures. Below each statement, there are four times given. You must decide what time the little boy is thinking about. Mark the letter (A-D) of that time on the answer sheet.

For example:

“I always have cereal and milk for breakfast. The box of cornflakes is probably on the table right now.”

What time is the little boy thinking about?

- (A) 9:00
- (B) 12:00
- (C) 5:00
- (D) 6:00

The little boy is describing the picture shown at 9:00. Therefore, you should choose the answer marked (A).

Now, begin reading the statements below. Remember to mark your answers on the answer sheet.

1. “I start looking for my father at least an hour before he gets home. I stand at the window and wait.”

What time is the little boy thinking about?

- (A) 2:00
- (B) 3:00
- (C) 4:00
- (D) 5:00

2. “Lunch is always good. I usually have a sandwich and I drink at least one glass of milk. Sometimes I have more.”

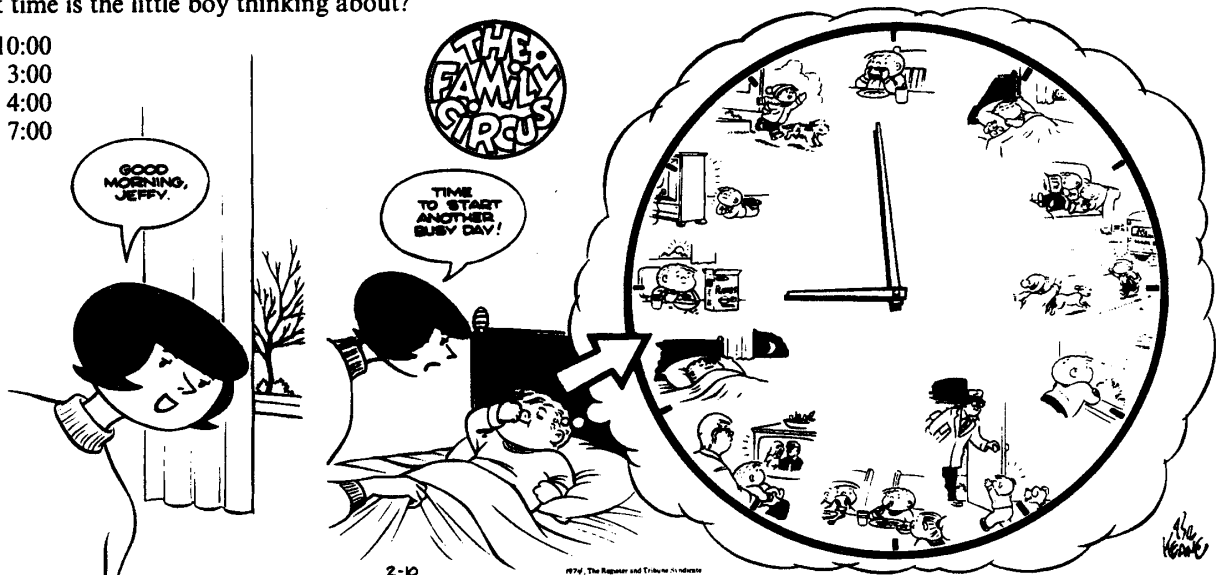
What time is the little boy thinking about?

- (A) 9:00
- (B) 12:00
- (C) 5:00
- (D) 6:00

3. “I like watching cartoons and cowboy programs. My mother is busy, my big brother is in school, and my father isn't home yet, so I can watch what I want.”

What time is the little boy thinking about?

- (A) 10:00
- (B) 3:00
- (C) 4:00
- (D) 7:00



## Appendix 2

TOEFL (Test of English as a Foreign Language)  
との対照表

SLEP Total Scaled Score	Expected TOEFL Total Scaled Score
64	600
58	550
53	500
47	450
42	400
37	350
31	300

この表は、SLEP テストや TOEFL を作成しているアメリカの Educational Testing Service が発行している *SLEP Test Manual* という冊子に掲載されているものである。TOEFL は英語を母語としない者がアメリカやカナダの大学に入学を希望する際、必要な英語能力を持っているかどうかを測る目的のテストである。これに対して、SLEP テストは英語を母語としない中学・高等学校レベルの生徒の英語能力を測る目的のテストである。そのため SLEP テストと TOEFL は設問の形式や難易度も違い、一般的にはその値を単純に比較することはできないが、参考のために掲載する。ちなみに1998年から2002年まで5年間のスケールド・スコアの上位5名の値は、54, 50, 50, 50, 49であった。